

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第67回



ヒドゥン・カリキュラム (3) この子、忘れ物しても平気なんです

★あの子、今頃困っているだろうな

先日、体験入門に初めて来られたお母さんが、息子さんが学校で忘れ物をして困っているというお話をされました。

どのように対応しているかと伺ったところ、「学校で困っているだろうと思って、毎回忘れ物を届けています。でも、その場でしっかり叱っています」とのことでした。

そこで、次のように申し上げました。「お母さんの行為は、ヒドゥン・カリキュラムとって、意図していることとは異なったメッセージを彼に与えていることとなります。つまり、“必ず届けてあげるから忘れ物しても大丈夫だよ”という誤ったメッセージです。失敗したら、つまり忘れ物したら、自分でその責任を取らせなくてはなりません。よって忘れ物したら、そのまま放っておけばよいのです。学校で困れば、忘れ物しないように気をつけるようになるでしょう。忘れ物はお母さんには関係ないので、叱る必要もありません」。すると、「忘れ物しても困った素振りも見せません。毎日、忘れ物しても平気なんです。担任の先生も諦めているみたいです」と、落胆してお話されました。

★僕はいつも忘れ物する子

そこで、次のように続けました。

「周りの大人が、この子はよく忘れ物する子だと断定的に、キャラクター作りをしていませんか？ たまに忘れ物しないで登校できたときでも、先生が『おっ、珍しい！ 今日忘れ物しなかったんだ』

のように驚いて見せることで、『お前は“忘れ物キャラ”なんだから、ちゃんといつものように忘れ物しなきゃダメじゃないか！』といった誤ったメッセージで彼に伝わってしまっています。先ほども、この子の前で『いつも忘れ物するんです。忘れ物しても平気なんです』と初対面の私にお話しされましたが、『あなたは、いつも忘れ物する子、そういう子だもんね。今、空手の先生にも伝えたからね！』と念押ししていることとなります。周りの大人が、そのような対応を続けていると、本人は『自分によく忘れ物をする人！ 周りの期待に応えて、いつもしっかり忘れ物しよう！』となります。“いつも忘れ物をする人”という安住の地を見つけ、そのぬるま湯の中で満足してしまっているの、彼は変わろうとしないのです。このように、相手に対して周囲の期待が低いと、相手のパフォーマンスが低下してしまうことを“ゴーレム効果”と言います。息子さんは、周りの期待を裏切らないように、忘れ物をあえて続けていると考えられます」。

★周りの大人の対応（お母さんの場合）

それでは、周りの大人はどのように対応すればよいか考えてみましょう。まずは、お母さんです。さきほどのお母さんに、次のように続けました。

「いくら息子さんが“忘れ物常習犯”だとはいえ、極まれに忘れ物をしないときがあります。ほとんどの大人がやっていないことですが、そのときには何のプラスの声掛けもしませんね。忘れ物したときは、怒鳴り、嘆き、マイナスの言葉を浴びせますが、

忘れ物しなかったときは何も声掛けしません。なぜなら、マイナスの状態からやっとプラスマイナスゼロになった、つまりやっと普通になった、との思いから、その望ましい行為について触れてあげる気にもならないからです。実はこのときに、『おっ、今日は忘れ物しなかったね。やっぱり昨日の夜、2回チェックしてからランドセルに入れたのが良かったね』のように声をかけてあげることが大切です。“忘れものキャラの子”も、たまには、『今日は忘れ物しないように頑張ってみよう』という日があります。しかしながら、そんなときに限って、その頑張りを誰も評価してくれません。長い間、“お前は忘れ物をする子”と言うキャラ作りに周りの大人が加担してきたので、同じくらいの時間をかけて“忘れ物しない子”の新キャラ作りに、周りの大人の前向きな声かけで変化を促していくしかありません。

★周りの大人の対応（先生の場合）

次に、担任の先生の対応です（空手指導者のみなさんは、道場でよくある「拳サポ、片方忘れました」への対応として読み進めてください）。

教室で忘れ物してきた子がいます。授業がすでに始まっているにも関わらず、自分から言いに来ません。本人に分かってもらうため、先生はあえて声をかけず、放っておくことにしました。つまり、「忘れ物すると自分だけ何もできなくて困りますね。反省して気づいてくれるのを先生は待っています。前日の準備が大切だということが今日はよく分かりましたね。明日からはもう大丈夫だね」というメッセージを与えているつもりです。しかしながら実際には、その意図は次のように変形して子供たちに伝わって

います。

▶忘れ物した子へのメッセージ

「忘れ物する子、先生は嫌いです。顔も見たくないので、授業にも参加せず一人で困っていなさい」

▶周りの子へのメッセージ

「忘れ物するとこんな風は無視されるんだぞ！次はお前たちの番だ！」

忘れ物したら困ればよい、という対応は正しいと思います。自分で気づいて直していくしかありません。しかしながら、愛の無い冷たい対応として伝わるので、忘れ物した子は“無視された、嫌われている”と自暴自棄になり、却って忘れ物クセが直らないことも考えられます。しっかり話をして理解させてから忘れ物したものを貸してあげるなど、最後には愛情をもって授業に参加させるべきでしょう。

このときに、忘れ物した子への対応を、子どもによって変えてはいけません。A君には貸さずに困らせる、Bさんには優しくすぐに貸してしまう、など。そのときの気分によって対応を変えていては、先生に対する不信感につながり、子供たち全体が、先生の指示に従わなくなっていくます。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その 20

■紹介者へのお礼① ずうずうしいと思われたくない！

体験入門者の紹介をしてくださった保護者には何かお礼をしたいですね。お礼をしたら次も紹介してくれるのではないかと期待してしまいます。そこで、“紹介してくれたら、紹介者に拳サポータープレゼント”と道場生のママさんにお知らせを配ったことがあります。しかしながら、反応はゼロでした。

あるママさんに、なぜ反応が無かったのか理由を伺ったところ、「みなさん、『拳サポーターが欲しくて紹介した』みたいに、ずうずうしいと思われたくないのだと思います」と教えていただきました。「なるほど、そんな風に考えるんだ」と軌道修正を試み、次は、“紹介者と被紹介者、双方にプレゼント”としました。つまり、「私が

プレゼントを欲しい訳ではなく、相手のママさんがプレゼントをもらえるから紹介しました」と言い訳を作ってあげたのです。このやり方は、かなりの反応がありました。

このように、「何でもいからモノをあげておけば喜ぶだろう」、「タダでもらって喜ばない人はいないだろう」という考えは浅はかです。“私が欲しいから”ではなく、“道場のために貢献したくて善意で紹介しました”、“自分は何もいらぬから、ママ友にプレゼントをあげてください”のように誰もが思われたいのです。この件を通して、改めて、相手の立場に立って考えることの大切さを学びました。